古沢頼雄編「見えないアルバム」（彩古書房）をよむ

津守　真

二十年間にわたる子どもの成長に、「研究者」としてかかわった編者と、夏の合宿共同体験を中心に協力した多数の若い人たちと、その子どもたち自身と、親たちと、子どもをめぐる「地域社会」の人々の相互の成長のダイナミクスを、この書物は、それぞれの人々の証言を通して明らかにしている。一見平易に書かれているが、稀に見る書物である。

「研究者」としての編者は、子どもとかかわるうちに、「自分自身は『研究』という枠以上の責任をもっている」ことを考えるに至る。そして、研究者というよりも、人間として一緒に生活するのにふさわしい者は何かを探究する者となる。

「地域社会」という語をこの書物では使っていないのだが、私には、ここでの試みは現実の地域社会のひとつの縮図のように思える。編者はこれをヒューマン・リレーションシップ・ラボラトリー（HRL）と呼び、夏のキャンプを中心に構成する、人間関係体験の場としている。二十年間にわたる子どもの成長が、単に個人のことにとどまるのではなく、一緒に生活する大人の成長があってこそつくられる人間の成長の過程は、ここでの試みによって、大まかに示されたようにすら思う。

書物の全体は、四つの部分に分けられる。第一は、編者の古沢頼雄自身の立場を述べた部分、第二は、夏のキャンプに長年にわたって参加した、当時は若かったスタッフたちの子どもとのかかわりについて、スタッフたちが記した部分、第三は、これに参加した子どもたち自身が、この間にとくにスタッフたちとの間で体験したことを記した部分、第四は、スタッフ自身がこの場を通してこの間に体験し学んだ自らの成長を記した部分である。この間に親の体験もちりばめられる。

このような夏のキャンプの場合、しばしばリーダーの主導的な計画や、強烈な個性が、スタッフや子どもたちを方向づけ、その枠内で記録し、話し合い、早急な研究的議論がなされやすい。この書物の場合、そのようなことがない。参加する人々すべてが、同等の立場で、自分できめて、自分で行動することが許されている。そのことをひとつの技術として用いているのではなく、リーダーである編者自身が自らを徹底してそのような立場においておられるように、私には思われる。この書物でも、編者の執筆部分はごく僅かであっ

て、大部分が参加者である他の人々によって書かれていることは、このキャンプの性格を示している。

スタッフたちの子どもとのかかわり方も、「ひたすら目の前の一人一人の子どもの次から次への要求や気持ちに耳を傾け、必要な援助を積み重ねてきた」と述べられているように、子どもに対して、心身の労を払うことを惜しまない態度である。

そのことを、子どもたち自身がどのように感じ、受けとめてきたかが、いまや二十歳をこえた子どもたち自身が執筆している。はじめは「怒らない」やさしい先生を、子どもたちがどのように考えるようになるか、青春期に入るころに、大人の気持とのズレが生じてくる時がある、それがどのように経過してゆくかは、このようにしてつくられたコミュニティでなければ、明らかにしえないものであろう。

スタッフの多くは、かつては学生であり、現在は、社会人、教師、主婦などである。その人たちの現在にとって、この人間関係体験の場での「とまどい」に当って学んだことが、いまなお生きていることを、この手記は知らせてくれる。このスタッフたちも子どもたちも、成人し、壮年期になって、それぞれが次の世代に向って、次の世代の人々と新たな社会を形成しつつある。このときに、ここでの体験が、人間理解の根底として深く根ざしていることを知るのである。

私は、この書物をよみながら、幼稚園、保育園、学校施設などのことをたえず想い起さ

せられた。この書物が、夏のキャンプの場のことだから、夏のキャンプにだけ通用するのだというようには、私には考えられない。それはコミュニティの中での人間の成長に、普遍的なものを含んでいる。

編者が処々に述べている命題「おとなの心的展開なくして子どもの成長はない」ということは、ことばはいろいろに言いかえられても、保育の実践の根本である。このことを、ダイナミックに、平易に示しているこの書物を、丁寧によまれることをおすすめしたい。

場が異り、人が異れば、具体的には違った生活がつくられる。しかし、人間にかかわる仕事をする者にとって、この書物の中に脈打っているものの見方は、共通のものを含んでいると思う。

（「見えないアルバム」彩古書房　一九八六年　一、五〇〇円）

（愛育養護学校）